

序

理学療法士にとっての臨床現場は、患者さんや対象者さんにとってよりよい状態を創出するために“臨床推論をくり返す場”であると言えます。この臨床推論のくり返しこそが、理学療法士の専門性を磨く唯一無二の方策であると考えますが、現在、臨床推論を育む過程において2つの大きな課題があります。

1つ目は、臨床推論を指導する教員や臨床実習指導者が具体的にどのように教示すれば効果的な教育となるのか、今なお、この教育方法のゴールドスタンダードの構築が継続的な課題となっていることです。通常、熟練した理学療法士は、臨床場面ごとに臨床推論を目に見えない暗黙知で瞬時に展開させています。一方、学生や経験年数の浅い理学療法士が行う臨床推論の展開は難易度が高いため時間を要するものとなっています。この状況において「理学療法士作業療法士養成施設指導ガイドライン」では、臨床実習教育の3つの目標の1つとして、「社会的ニーズの多様化に対応した臨床的観察力・分析力を養うとともに、治療計画立案能力・実践能力を身につける」と臨床推論力の習得を定めています。さらに、日本理学療法士協会策定の「臨床実習教育の手引き（第6版）」では、「理学療法の流れを理解するとともに、臨床内容の意義を理解して説明することができる」、すなわち学生が考えたオリジナルではなくチームで考えた臨床推論について説明できることが臨床実習の一般的目標（general instructional objectives）として謳われています。つまり、臨床推論力を育むことは、理学療法士教育にとって必要不可欠でありながらも、教育効果の高い方法が依然として確立していないことが課題と考えます。

2つ目は、新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）の影響を受け、学内教育において臨床現場のリアリティが感じられる新しい臨床推論の教育方法の構築が喫緊の課題となったことです。

理学療法士の臨床実習教育のなかでこれまで脈々と受け継がれてきた有名な言葉があります。

—To learn medicine and without reading the book is equal to leave the voyage was without a chart. Equal to not appear at all in the voyage is to try to learn medicine and Ms. patients. (本を読まずして医学を学ぶことは海図をもたずして航海に出るに等しく、患者を診ずして医学を学ぼうとするのは全く航海に出ないに等しい。) —

William Osler, 1849-1919年

この言葉を理学療法臨床実習教育に当てはめ超訳すると、「学内教育で理学療法に必要な知識を十分に学習しないのは理学療法士にとって必要不可欠である臨床推論の道標をもたずに理学療法士をめざすようなことであり、患者や対象者との直接的な臨床実習

経験なしに理学療法を学ぼうとすることは、理学療法士の専門性を磨く方策である臨床推論力を育むことに繋がらない」と解釈できるのではないのでしょうか。いずれにしても、臨床推論力は臨床実習により大きく育まれる要素であることを疑う余地はありません。

しかし、COVID-19の状況下では、学生が患者さんや対象者さんに対する理学療法士の臨床推論過程の連続を肌で感じ学ぶ、貴重な機会の減少が懸念されます。そのため、学内教育においてリアリティが感じられる新しい臨床推論の教育方法を構築することは、今後ますます重要な課題となると考えられます。

そこで本書は、これら2つの課題を解決すべく、学生や経験の浅い理学療法士などが臨床推論力を高めるための土台づくりを支援する構成としました。

- 理学療法士が臨床でよく経験する疾患のなかから15症例を抽出。
- 動画と患者情報から臨床現場を模擬的に再現。
- 熟練した理学療法士が暗黙知で行っている臨床推論プロセスを形式知化。
- 臨床推論への理解が深まる演習課題を掲載。

臨床で全く同じ症例を担当することはありません。しかし、理学療法を学ぶ初学者にとって、本書で紹介した熟練理学療法士の代表的な疾患に対する臨床推論を理解することは、自らの臨床推論力を磨く一助となることを信じてやみません。

最後にCOVID-19が蔓延する最中、いち早くリアリティを追求した理学療法士の臨床推論教育の構築にフォーカスを当て、ともによりよい教材づくりのために動画撮影にご協力いただきましたすべての皆様、ならびに尽力した羊土社金子葵氏に感謝いたします。

2021年8月

帝京科学大学
豊田 輝